

4 「内経」「真」字考

宮川 浩 也

宋の戴侗の『六書故』によれば、儒家の經典には「真」字がなく、道家の書に始見するという。その「真」字が『素問』に六三見するばかりでなく、『靈枢』にも二七見する。つまり、道家思想の影響も強いことが知れる。その用字例を検討したので報告する。

一、字義

主な意味は、真実・不変・自然・天性・本質・真誠・仙人・まことに(副詞)である。さらに、清の段玉裁は「真」を声符とする諧声系列の字は充実の意味があるといひ(『説文解字注』)、白川静は「真」を字形のうちに含む顛・慎・填・鎮・瞋などは、いずれも顛死者と、その呪鎮の法に関する字であるという(「字統」)。

二、避諱

唐の楊上善は、経文の「真藏」を「正藏」に作るテキスト(古本)があり、これは秦の始皇帝の名「正」を避けて「真」字を使ったもので、真と正は意味は同じであるという(『太素』巻十四「真藏脈形」注)。陳垣の『史諱举例』(巻八「歴朝諱例」)によれば、始皇帝の名は「政(一作正)」を避けて「正月」を「端月」に代えた例があるという。また、『史諱举例』によれば、宋代は始祖「玄朗」の「玄」を避けて「真」字を用いたという。

三、用例

①真気 最も多く使われるのが真気で、『素問』に九見、『靈枢』に十二見する。真気と明記していないが文脈から真気と考えられる真字は『素問』に七見、『靈枢』に八見する。

『靈枢』刺節真邪篇に真気・正気・邪気の別が書かれている。真気とは生まれつきの気(先天の気)で、食物から得た穀気(後天の気)とともに全身に満ちていて、正気(発症性が弱い邪気)や邪気(発症性が強い邪気)と対峙する自然治癒力に相当する。真気は邪気と相対する語であるため、『靈枢』経脈篇のような邪気観点のない篇には見えない。

い。

楊上善は正字を真字に替えたというが、刺節真邪篇に真氣・正氣と全く別の氣を設定しているから、真藏を正藏に替えた可能性はあるものの、すべての正を真に替えるとすれば矛盾が発生する。

②真人 道家のいう得道の人で、『素問』に五見し、上古天真論篇に二見、移精變氣論篇・六微旨大論篇にそれぞれ一見して、『靈樞』には見えない。金匱真言篇に「非其真勿授」とある「其真」は真人を指すものと考えられるが、『太素』はこれを「其人」に作り、『靈樞』官能篇の類文も「其人」に作るから、後人が改めた可能性がある。③真藏 真藏脈とは胃氣(のカバー)の無い脈で、藏の真が露出する死脈である。真藏は『素問』に十五見するだけで、『靈樞』には見えない。「真藏」と同じ使い方の「藏真」が『素問』平人氣象論篇に五見する。この概念は『素問』平人氣象論篇と玉機真藏論篇に重点的に見え、陰陽別論篇・三部九候論篇・示從容論篇に散見するだけである。

④真牙 『素問』上古天真論篇に二見するが、森立之によ

れば「齲」字の古字で、俗の「糸切り歯」だということ。とすれば、道家とは無関係である。

⑤真骨 『靈樞』逆順肥瘦篇に「壯士真骨者」と二見する。「壯士にして真骨なる者」とは、文脈から解釈すれば筋骨が堅固なことをいうものと考えられる。段玉裁のいう充実の意味をとれば、真骨は充実した骨格と解釈できる。これも道家と無関係だろう。

⑥その他 真肝脈・真心脈・脈脾脈・真肺脈・真腎脈・真頭痛・真心痛があり、これらは真藏と同義の真で、いづれも致死の表現である。真色は自然の色の意味で、病色ではない。このほか真数、真靈、真要などの例が見られる。

(北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部)